

「生と死の教育の必要性」Ⅲ

—キリスト教の死生観、特に「復活」についての考え方との関連で—

岡 本 富 郎

Ⅰ．問題の所在と研究の目的

筆者は本紀要第19号において「『生と死の教育の必要性』Ⅰ—キリスト教の死生観との関連で—」を書いた。また、第21号において「『生と死の教育の必要性』Ⅱ—キリスト教の死生観、特に死についての考え方との関連で—」を書いた。第19号においては「いのち」と「永遠のいのち」について、第21号においては「死」について、それぞれキリスト教とキリストの考え方について書いた。その際、「いのち」にしても「死」にしても「死後生」と「復活」との関連で考える必要性があると述べた。今回は人間が死んだ後の「死後生」を飛ばして「復活」について論じたい。本来時間的な順番で考えるならば、「死後生」について論じ、その後で「復活」について論じるべきであろう。しかし、二つの理由でそうしなかった。一つの理由は、筆者が「死後生」についていまだ勉強不足であること。二つ目の理由は現在の子どもたちが人間は死んだ後生き返るということを一定数信じているということがあるからである。もし、いじめられて自殺をする子どもの中に、生き返るという意識があるならば、看過することが出来ない。このことについて一つの調査の中から紹介しよう。日本女子大学の中村博志は『死を通して生を考える教育』という著書の中で自ら行った調査結果を紹介している。^(註1)一つの調査の対象者は大学生973名である。その中の「あなたは死後の世界の存在を信じますか」という設問に対して、YESが56%, NOが44%である。次に372名の小学生、(3年生74名, 19.9%, 4年生126名, 33.9%, 5年生66名, 17.7%, 6年生106名, 28.8%)に対して、「一度死んだ人が生き返ることがあると思いますか」と言う設問に対して、①ある, が126名, 33.9%, ②ない, が126名, 33.9%, ③分からない, が117名, 31.5%であった。「人が死んだらどうなると思いますか」という設問に対しては、「天国や地獄へ行く」という内容の回答が多数であった。この数字をどう読むかは簡単ではない。即断すべきではないであろう。しかし、大学生の56%が「死後生」を信じているという数字は低くはない。また、小学生の答えとして、「一度死んだら生き返ることがある」と「ない」が同じ33.9%分からないが31.5%でほぼ同数であることが確認できる。少なくとも3分の1の児童は「生き返る」ことを信じているのである。このような調査をさらに積み重ね、子どもたちの意識の分析を進める必要がある。今回は同様の調査結果を紹介することが目的ではないので省略するが、生き返るにしても、そうでないにしても、それらとの関係で生きていることの大切さをどう教えるかがわれわれに問われている。また、子どもたちがどのような意味で生き返ると思っているかが今後分析されなければならないであろう。

以上のようなことを問題意識として持ちながら、今回はキリスト教の「生き返り」すな

わち聖書の用語でもある「復活」の考えを探ることにする。キリスト教の「復活」の思想が「生と死との関係」について一つのヒントを与えてくれれば「生と死の教育」に役立つと思うからである。

研究方法としては、聖書を自ら読み分析し、かつ聖書を研究し、解釈し、解説している文献を読み、筆者の考える内容を記すことになる。

Ⅱ. キリスト教の「死生観」特に「復活」について

1. キリスト教の「復活」について考える意味

キリスト教は十字架で殺されたキリストの復活がなければ存在しないと考える。キリストの弟子たちはペテロでさえ、キリストの仲間であることを三度も否定したのである。殺されてしまったキリストが復活しなかったら弟子たちはローマ帝国に逆らうことが出来ずに元の生活に戻ってしまったであろう。事実、キリストの奇跡を目の当たりに見、「あなたこそ神の子キリストです」と告白したペテロでさえ、元の漁師に戻っていたのである。何故キリスト教が始まったかについて研究している学者たちは、キリストの復活を避けて通れないことを認識している。これまで、それこそ多くの人がキリストの復活について研究し、その結果を多様な方法で表現している。それほどキリストの復活は重要な意味をもって人々に語りかけているのである。私たちも一度このキリスト自身及びキリスト教の復活について考えておくことが問われると思う。そして、わが国の子どもたちに「生き返るとはどういうことか」「復活するとはどういうことか」を考える素材を提供することは意味のあることと考える。

2. 新約聖書の「復活」の考え方—特にパウロの考え方—

パウロは「第Ⅰコリント人への手紙第15章」で彼の復活観を展開している。このパウロの15章についてカール・バルトは次のように言っている。「死人の復活についての章は、第一コリント書の脈絡全体の中で一見そうらしく見えるほど、それほど孤立しているのではない。この章は全書簡の結論および最頂点をなすのみならず、実際また鎖鑰点（戦略拠点）をなしている。そこから光が全体に投ぜられ、そこから本書が外面的にではないまでも、内面的に統一あるものとして理解されうる。そればかりではなく、人はこう言わねばならぬであろう。この章に公然と言い表されている思想の、この中心的な意義は、第一コリント書の枠組みをはるかに越え出たものである、と。パウロはここで一般に彼の中心点、彼の背景、彼の前提を覆いをはいで示している。しかもその他の書簡ではめったにしたことがないほどの明確さをもって、また周知の彼の他の書簡では決してしなかったほど詳細をきわめて、自分の手の内を示して見せている。ローマ書やピリピ書やコロサイ書でさえ、第一コリント書15章の光に照らして得られる鋭いアクセントを考慮しなければ、それらの諸書簡の記述を到底理解することはできないであろう。（中略）この章が新約聖書の証言一般を理解するためにどんなに決定的に重要であるか、まあわたしが言明する必要はある

まい。」^(註2)

バルトは「第Ⅰコリント」(以下このように略称して用いる)第15章が新約聖書を理解するために決定的に重要であると言明している。これが何を意味するのかいうと「第Ⅰコリント」15章に書かれている復活が新約聖書、また、新約聖書の元になり新約聖書の福音を生み出す元となっている旧約聖書をも理解するために重要であるということである。いうならば聖書全体、キリスト教全体を理解するために重要であるといってもよい。それほど「第Ⅰコリント」等で記されている復活はキリスト教にとって重要な意味を持っているのである。キリストが十字架上で死んだだけならば、単に一人の思想家としての存在意義しかないであろう。そうではなく、キリストが生前語り、約束した内容は、人間には考えられない復活によって確証されたことを意味するのである。しかも、後述する自身の預言によって復活するのであればなおさらである。この復活自体の学問的な研究の詳細の紹介は今回は省く。今回は聖書に書かれている復活について、その考え方を紹介し、理解することが直接の目的である。「生と死の教育の必要性」においては、十分それで目的を果たすと考ええる。

さて、そこでこの「第Ⅰコリント」第15章を書いたパウロは、生前のキリストとはもちろん会ってはいない。彼は厳格なパリサイ派のガマリエル門下の律法に忠実なユダヤ教徒であった。そして、初期のキリスト教徒を殺す手伝いをしていた人物である。その彼が復活したキリストの言葉を直接聞いてキリスト教徒になったのである。キリストの語りかけを聞いた後、かれはベテロや使徒たちに会うことをせずにアラビヤに行って『聖書』と祈りを通じて神との交流を経験し、キリストの地上での生活の意味と福音の意味を知ることになるのである。彼は奥義の啓示によってキリストの福音を知ったという表現をとっている。彼が使徒たちと会わずに直接復活して生きているキリストと会って体験的にじかにキリストと交流したということが彼の人生のすべての土台となっている。彼が迫害され、殺されかかったことや、度重なる鞭打ち、石打ち、獅子に食われそうになったことなどの中で、希望を持ち、喜びに満ち、神を賛美することが出来たのは、決して彼の人間としての能力によるのではない。生きている神と実際に触れ合ったからこそ、そのような迫害の中でも喜びにあふれていられたのである。また、彼は人が聞いてはいけない声を第三の天に行き行って聞いているということも述懐している。その体験についての言葉を引用しよう。

「無益なことです、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に－肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。－第三の天にまで引き上げられました。私はこの人が、－それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです。－パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。」(「第Ⅱコリント」12・1－4)^(註3)という表現でその体験を紹介している。これは間違いなくパウロ自身のことである。彼は天上に昇って人間が聞いてはいけない、口にしてはいけないことばを聞いたのである。復活して生きているキリストと天上で会っているのである。このようなことは一般的には信じがたいことではある。しかし、聖書の中でパウロはそのことを述べており、キリスト教徒はこのことをキリスト

の復活と共に受け入れているのである。

ところが、ことはパウロ自身の経験だけではすまない。パウロが経験した第三の天の体験の内容はその経験だけで終わらないのである。パウロは特別な主の啓示を受け自分の役割を与えられたのである。その重要な内容の基本が信仰義認であり、復活信仰である。彼の復活に関する言葉からいくつかを引用しよう。

- 1)。「聖い御霊によれば、死者の名からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリスト」(「ローマ」1・4)
- 2)。「キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを私たちは知っています。」(「ローマ」6・9)
- 3)。「私があなたがたに最もたいせつなことからして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書のしめすとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケバに現れ、それから十二弟子に現れたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様に私にも、現れてくださいました。」(「第Iコリント」15・3—8)

パウロはキリストが復活した後、現実によくの人に現れたことを具体的に述べている。この事実についてはペテロらも聖書の中で述べている。

- 4)。「私たちは、イエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。」(「第Iテサロニケ」4・14)ここでは「イエスにあって死んだ人々」すなわちイエスを信じ、受け入れた人々を再臨(イエスが再び地上に来ること)のときに、連れて来ることが言われている。

以上のほかにパウロはキリストと信じるものの復活について聖書の中で多様に表現している。しかし、ここではそれらの言葉を紹介することが主目的ではないので省略する。

3. イエス自身の「復活」についての言葉と考え

ここで復活という言葉について説明しておきたい。聖書には「復活」という言葉と「よみがえり」という言葉の両方が用いられている。ギリシア語では「アナスタシス ἀνάστασις」である。多くは復活と訳されるが、「よみがえり」と訳す場合もある。さらに「ἐγείρω」(目覚める、上げられる)が「よみがえる」と訳されることもある。今回はこの違いを意識して分けないで用いることにする。

さて、そこで先ず、聖書の中からイエス自身が「復活」「よみがえり」について言及している言葉を紹介したい。

- 1)。「彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは彼らに言われた。『人の子はいまに人々の手に渡されます。そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。』」(「マタイ」17・22—23)
- 2)。「さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼ん

で、道々彼らに話された。『さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。』(「マタイ」20・18)

3)。「しかし、わたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」(「マタイ」26・32)

4)。「祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい人、不具の人、足なえ、盲目の人たちを招きなさい。その人たちはお返しが出来ないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」(「ルカ」14・13-14) 先にはパウロが「イエスにあって死んだ人々」と表現していたが、一般的にはその人たちは「義人」と呼ばれ、その義人たちの「復活」を「義人の復活」とイエスは言っている。

5)。「イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日で、それを建てよう。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日間で建てるのですか。』しかし、イエスのご自分のからだのことを言われたのである。それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われた言葉とを信じた。」(「ヨハネ」2・19-22) ここでイエスは、神殿である自分が死んで三日目によみがえると言っている。そして、聖書はそのとおり三日目によみがえったと記している。

6)。「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。」(「ヨハネ」6・39)

7)。「わたしを遣わした父が引き寄せないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(「ヨハネ」6・44)

8)。「わたしの肉を食べ、私の血を飲むものは、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(「ヨハネ」6・54)

9)。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じるものは、死んでも生きるのです。」(「ヨハネ」11・25)

10)。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えにいくのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなた方をわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(「ヨハネ」14・2-3) イエスは、イエス自身が復活し、イエスを信じる人々のために、場所を用意に行く、と声明している。その場所とは即ち、死後、イエスを信じた人たちが住む場所である。今回の研究の主目的ではないが、ここから分かることとして、イエスは「死後生」の存在を明確に説いているということが分かる。

Ⅲ. サドカイ人のキリストへの「復活」の問いについて

本研究は、以下のキリストとサドカイ人との復活についての論争の分析を主眼とする。ここの論争からキリストが復活についてどのように考えているのかが理解できる。人間の生と死そして復活をキリストがどのように考えているかを理解することは、われわれや子どもの生き方に繋がる重要問題である。先ず聖書からやり取りの内容を紹介しよう。

「その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問して、言った。『先生。モーセは、もし、ある人が子のないままで死んだなら、その弟は兄の妻をめとって、兄のための子をもうけなければならない、と言いました。ところで、私たちの間に七人兄弟がありました。長男は結婚しましたが、死んで、子がなかったので、その妻を弟に残しました。次男も三男も、七人とも同じようになりました。そして、最後に、その女も死にました。すると復活の際には、その女は七人のうちのだれの妻なのでしょう。彼らはみな、その女を妻にしたのです。』しかし、イエスは彼らに答えて言われた。そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』とあります。神は死んだ者の神ではありません、生きているものの神です。』群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。」（「マタイ」22・23-33）このサドカイ人とのやりとりから学ぶことにしたい。

1. サドカイびとについて

サドカイびとについて先ず紹介する。サドカイ人またはサドカイ派という名称が聖書に出てくる。彼らは復活を信じていなかった。一方、ユダヤ人のもう一つの大きな派であるパリサイ派があり、パリサイ派は復活を信じていた。当時この両派は何かと対抗していた。サドカイ派は金持ち、上流階級とつながり、政治団体に近く、当時の最高会議である、サンヒドリンの大半を占めていた。彼らは時の権力者と結びつき、世俗的主義的な考えを持っていた。それに対してパリサイ派は民衆の側に立ち、復活を信じていた。先に引用した箇所は、復活を信じないサドカイ派がイエスを何とか落としいれようとして旧約聖書を用いて論争を挑んできた場面である。彼らは旧約聖書のモーセ五書しか信じていなかった。イエスはもちろんモーセ五書はじめ聖書全体に立っていた。サドカイ派はイエスがモーセ五書に立っているのを知った上でモーセ五書に基づいてイエスをやり込めようとしたのである。サドカイ派の根拠は旧約聖書「申命記」、第25章5節にある義理の兄弟の弟の結婚、いわゆるレビラート婚に関する法律である。その箇所を引用しよう。「兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだものの妻は、家族以外のよそ者にとついでではない。その夫の兄弟がその女のところに、はいり、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。」ここにみられるように、兄が死んだら弟が兄嫁と結婚をして義務を果たさなければならないとされている。復活があるならば、この聖書の言葉と矛盾が起きるのではないかという主張がサドカイ派の考えである。この世の財産や、地位、社会的な立場を重視する彼らにとっては、復活は生活上

から来る問題であったのである。このやり取りについて内外の研究から学び、私見を展開したい。

2. イエスの答えについて

1). 先ず、イエスはサドカイ派の問いに対して「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。」と簡単に論している。(Π λ α ν â σ θ ε μ ῆ ε ἰ δ ό τ - ε ς τ à ς γ ρ α φ à ς μ η δ è τ ῆ ν δ ú ν α μ ι ν τ ο ũ θ ε ο ũ.) 重要な内容の文章は新約聖書のギリシア語を紹介することにしたい。^(註4)

この点について論じよう。この場合の聖書は旧約聖書のことを指している。サドカイ派が用いた、レビラート婚が書かれているモーセ五書を含む39巻の聖書全体である。モーセ五書、詩篇、預言、の聖書である。ここでイエスは彼らが「思い違いをしている」と指摘している。復活にしてもそうだが、われわれもその内容について思い違いをしてはならない。この復活とはどういうことかをよく理解して子どもたちに教えなければならない。サドカイ人の思い違いの理由は、彼らが「聖書」を知らないからであるとイエスは言う。旧約聖書は人類の救い主が来ることを預言している。先述したが、サドカイ人は、現世の生活を大切に、合理主義的、進歩主義的な考えを持っていた。そのような彼らは聖書の真の意味が理解できていなかった。何でもそうだが、書かれた文章の本質を見失って自己流に解釈をすれば思い違いをしてしまう。聖書は「聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してならない」と戒めている。「第Ⅱペテロ」1・20) キリスト教においては、神の人間に対する考え、教えは聖書を通して示されている。勝手な「啓示」とか「お告げ」とかによって自己流に神の教えを捏造してはならない。人間を通して神が新約聖書27巻を含めて、全66巻の聖書を成立させたのである。これは聖書の成立史、正典学で学問的に論じられている。^(註5)

サドカイ人は彼らが用いたモーセ五書の中の生活に関する律法を重視している。真の救い、神の考えを理解していなかったのでイエスを認めず、彼を亡き者にしようとしたのである。

もう一つのことに言及したい。それは、サドカイ人が「神の力も知らないからです。」というイエスの言葉である。

アラン・コールはこのことに関して次のように言っている「イエスの答えはサドカイ人達を二つの点で叱責するものであったが、忍耐と寛容の驚くべきものである。その第一は、彼らがモーセのことばを引用してそれに基づいていると主張した神の啓示そのものを理解していなかったことである。その第二は、彼らが特に聖書記者たちに示されたイエス・キリストの死からの復活(ローマ1・4)と、究極的な一般的復活(Ⅰコリント15・20-26)における神の力を認識していなかったことである。このことをイエスは、彼らが依存していたモーセの律法そのものから立証しようとした。」^(註6)。聖書の言葉を用いて、イエスは、神自身の啓示と復活とを教えようとした、とアランは言う。

このことについてもう一人の研究者の解釈を紹介しよう。関根正雄は次のように言っている。関根は「聖書の語る人間は罪・死に面する人間なのに、彼らはそれを知らない。またイエスは『神の力も』と言われた。それはどういう意味なのか。神の力は罪と死を克服

する恵みの力なのである。彼らはそれをも知らぬ。たかだか復活があると思う、という考え方、世界観をいだいているにすぎない。それは信仰でもなんでもない。パウロは第二コリントの手紙で、地上の幕屋にいるわたしたちは呻いている、と言っているが、その言葉を信仰者として言っているのである。信仰をあたえられていても、まじめに考えれば地上では、何ともならぬ罪、肉の重さを感じない訳にはゆかない。肉を持っているものの呻きがあることがわるいのではない。信仰は春の野をゆくように、ただ感謝感謝と言っていることではない。パウロも呻き苦しんでいる。いってみれば、そのくらしみがあるから、復活がある。聖書にしめされているのは、そういう人間の姿である。神に呼ばれ、しかも罪の故に神に従えぬことが多い人間の、罪びととしての姿。同時に義を求めざるを得ない人間の姿。それをサドカイ人、パリサイ人は知らない。それがわからなければ復活を知らないのは当然である。神の力は、そのような罪の呪いを取り去る、神のあがないの力である。そのことが旧約聖書に全体としてのべられているのは、言うまでもない。罪と、罪をゆるしあがないたもう神のいのちの言葉がわかれば、復活がわかる、とイエスは言われる。」^(註7) 関根は復活について、人間の罪と死、人間の生まれながらの性質である、肉の重さ故に、神に従えない、呻きを持つ人間性との関係で分析している。サドカイ人、パリサイ人たちは、人間の罪、人間存在の醜さを知らないので復活は分らないと関根は指摘している。

また、このことについて加藤常昭は次のように言っている。サドカイ人の「その思い違い、迷いは何に関わるのか。聖書も神の力も知らないのです。サドカイの人びとは聖書を知っていると思っているから、死後の甦りなんか無いと言っている。しかし、主イエスは、あなたがたは聖書を知らないから復活を否定するのだといわれる。それはどういうことか。神の力を知らないからだと言ってもいい。聖書を知るということは、神の力を知ることなのです。それなのに、聖書を知ると言いながら、神の力をわきまえていない。そこにこそ最も無知があると主は言われるのです。(中略) ここでは何を意味するのかというと、聖書の中に神の力を読み取ることが出来ない人間は、結局自分の生活を、自分が知っている地上の生活の延長の中でしか考えることができないということになります。」^(註8) ここで加藤は、聖書の中に神の力を読み取ることが出来ない、サドカイ人やわれわれの無知に関根の考えを補助するかのようには説いている。

2)。「復活の時には、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。」
(ἐν γὰρ τῇ ἀναστᾶσει οὕτως γαμοῦσιν ὅυτε γαμίζονται, ἀλλ' ὡς ἄγγελοι ἐν τῷ οὐρανῷ ἐ-
ῖσιν.)

次に上記の内容について触れよう。

「復活の時には天の御使いたちのようです。」とイエスは言った。天使とはどういう存在か。天使は霊的存在であって、神のつかいとして聖書には記されている。天使は霊だけの存在なので結婚や出産はない。したがって復活の時には人は天使のような存在なので、元の妻と結婚するとか、地上での延長線上の生活をするのではない。このことについて榎原康夫は『御使』は本来、からだのない霊だけの存在ですから、結婚や出産はありません。

ん。復活の人間が『御使いのよう』なのは、その結婚・出産・死亡のような肉的变化がないという点であって、決してからだなしで霊だけ存在し続けるという点まで似るのではありません。人間は、『復活の時』すなわち霊とからだとが結合する時、からだをもちながらも『御使いのよう』に結婚・出産・死亡することのない存在に変えられるのです。」と云っている。^(註9) 天国では結婚や出産はないということがここでも言われている。ルカによる福音書では「次の世にはいるのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また復活の子として、神の子どもだからです。」とある。(「ルカ」・20・35-36)

イエスは「次の世」つまり天国に入って「死者の中から復活するのにふさわしいと認められる人たちは」と云っている。これは先述した「義人の復活」のことである。イエスが再臨するときに先ず義人が復活することがパウロによって記されている。この義人は言うまでもなく、地上でイエスが神の子であると信じ、神の子とされた者のことである。そこで本旨を少しはずれることになると思われるが、復活そのものと関係すると思われるので、どのようにして復活するのかということに言及しておきたい。

そのことについてパウロは言う。「ところが、ある人はこう言うでしょう。『死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。』愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。(中略) 天上のからだもあり、地上のからだもあり、(中略) 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせられ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせられ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらせるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」(「I コリント」15・35-44) パウロは人間の復活を上記のように記している。われわれは霊のからだによみがえるとパウロは言う。天使のように、わたしたちは霊のからだによみがえるということがここで確認できる。

次の内容について論じることにはしたい。

3). 「それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」(περι δὲ τῆς ἀναστασεως τῶν νεκρῶν οὐκ ἀνέγνωτε τὸ ῥηθὲν ὑμῖν ὑπὸ τοῦ θεοῦ λεγόντος, 'Εγώ εἰμι ὁ Θεὸς Ἀβραὰμ καὶ ὁ Θεὸς Ἰσαὰκ καὶ ὁ Θεὸς Ἰακώβ; οὐκ ἔστιν ὁ Θεὸς νεκρῶν ἀλλὰ ζώντων.)

さて、上記の内容について考えてみたい。イエスはサドカイ人に対してモーセ五書の中から論そうとしている。

ここに「神は死んだ者の神ではありません。生きた者の神です。」(οὐκ ἔστιν

ν—でない ὁ θεὸς—神で νεκρῶν—死人らの ἀλλὰ—ではなく ζῶντων—生きている者。)とある。これはアブラハムたちが死んだ後のモーセに語った言葉である。これはどういうことであろうか。神は死んでしまった者には一切関係が無いということであろうか。そうではない。神はかつてアブラハム、イサク、ヤコブと契約を結び約束をした。そして彼らが死んだ後その約束を果たした。「生きている者の神です。」という意味は、死んだアブラハムたちは「生きている者の神」によって約束を果たしたてもらった。つまり、彼らは地上での生を終えて死んだが、死後、生きたものの神であるお方の前に生きている、ということである。かの世でアブラハムたちは生きているということである。

このことについてアランの解説から引用しよう。「もし神がこれら三人の死後何世紀もたってからでも、モーセに依然としてそのようにご自身を述べるができるなら、彼らの霊的経験は依然として存在しなければならない。もしそうなら、これら三人の族長たちは依然として存在しなければならないし、彼らの『永遠のいのち』を保証するのは、彼らが神を経験したことの性格にあるのではなく、彼らが経験した神の性格にあるのである。神は生きているものの神である。」^(註11) このアランの解釈について考えてみたい。ここで基本として確認できることは、アブラハムたち人間が死後、霊的に神を経験したということが重要なのではなく、神自身が生きているものの神であるという、神自身の性格が重要であるということである。実に我々は、神は死んだものの神ではなく、生きたものの神であるという、神自身の性格を知ることが出来るのである。

このことについてもう一人の人の考えを紹介したい。

高橋三郎は次のように言っている。「しかしイエスは、神は生命の主であり、『生きているものの神』だという事実に立脚して、重大なる帰結をそこから導き出した。神の契約は一貫して不変であり、神は今も生きておられる。そうだとすれば、『私はアブラハムの神』と宣言されるとき、そのアブラハムも生きていなければ、この宣言はその含蓄を失うではないか。神がこう言われたた以上、アブラハムもなお生きていなければならない。つまり出エジプト記のこの記事は、アブラハム（およびイサクとヤコブ）の復活を証明しているのだ、という論法である。これは、人間論として（つまり人間の側から観察した結果として）復活を結論するのではなく、神観に基づいて結論を引き出しているところに、その特異性がある。この一撃を受けて、サドカイ人の詭弁は打ち破られたという次第を、マタイとルカは（Q資料に基づいて）こう述べている。」^(註12)

この高橋の解釈は、アランと類似しており、成る程ととうなずくことが出来る。つまり、復活を人間の側から考えるのではなく、神がどのような存在かという「神観」から考える、ということである。

このことについてもう一人の研究者の解釈から学ぶことにしよう。榊原は「実は生きているというこの議論について、今日の専門家たちの間にも二つの大きな見方の分かれがあります。一つは、この論証で論証されているのは結局、死んでも『生きている』という死後の存在に過ぎない、別に復活は論証されない議論。それに対して、いや『生きる』というのは復活することだ、ただ単に死後の存在をイエス様はここで言っておられるのではなくて、やっぱり復活することを論証しようとしておられるのだと言う人と、二手に分かれ

てしまいます。それぞれにそれぞれの言い分があると思うのですが、わたくしとしては結果的には、やっぱり復活をイエス様は論証しようとしておられると取るのがよろしいのではないかと思います。(中略)。ルカでは『すべての人は、神によって生きているからである』とある。つまり、ただ死後の生存を言っているのではなくて、必ず神様との関係で生存しているからには、主によって生かされるときがくる、甦らされるときがあると、こうおっしゃりたいのだと思うのです。』^(註13) 榊原はこのような解説をしている。筆者もこの説に共鳴する。イエスは「復活については、神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。」という問いを発している。そして「神は生きた者の神です」といっている。後段の「生きた者の神です」は冒頭の「死人の復活については神があなたがたに語られた事を、読んだことがないのですか。」という言葉を受けた内容である。したがって「生きた者の神です」と言った時の、「生きた者」とは、復活のときの「生きた者」のことを言っていると解釈してよい。したがって、ここでは復活はあるとイエスが言っていると解釈することが妥当であると考えたい。もちろんイエスはここだけで復活を論証しようとしているわけではない。他の聖書の箇所でも復活の存在を先に引用したように多様に説明しているのである。何よりも自分が復活することを預言し、聖書に書かれているように復活を遂げている。このことこそが説得力を持つ論証である。

以上の内容と関連してイエスの復活の奥義の啓示を受けたパウロは聖書の次の箇所で、アブラハムやキリストにあって死んだ人たちがよみがえることについて次のように書いている。「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスと一緒に連れて来られるはずです。私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主と共にいることになります。」「(第Ⅰテサロニケ) 4・13—17)

パウロはこのようにキリスト者の復活について説明している。「ヨハネの黙示録」の中では、一般の人たちは、終わりのときに裁きのために復活するということが記されている。終わりのときにキリストが再臨し、千年間世界を治め、その後に真の終わりのときが来るという考えが「黙示録」には記されている。また、「黙示録」には、すべての人の復活があり最後の審判があって世界が神の手に移るといことも言われているのである。この最後の審判が何を意味するのかはここでは言及しない。ただ、誰でも無条件に同じように復活するのではないということをおきたい。聖書全体を通じて言えることは地上での生活のあり方が問われる、ということであろう。地上での人間による裁判もあるが神の裁きも、その内容がどのようなものかについては言及しないが、存在するということは知っておきたい。その意味では地上でのそれぞれの生き方が問われるし、大切なのである。簡単に、誰でも生き返るという思想は聖書には存在しない。このことを聖書から知っておき

たい。

Ⅳ.「復活」思想と「生と死の教育」との関係

キリスト教の復活の考え方をみてきた。この内容と「生と死の教育」との関係について簡単に述べたい。

先ず言えることは、どの宗教、そして思想でもそうであるが、その主張する内容をよく理解することである。勝手に解釈をするのではなく、正しく学ぶことである。たとえば、筆者は仏教の専門家ではもちろんないが、関心があるので自分なりに読んできた。世界的な仏教学者の中村 元は「輪廻転生」について以下のように言っている。少し長いが引用したい。「なぜ仏教が輪廻説をとったかと言いますと、当時のインドでは、もう自明の理として輪廻が認められていたからです。その輪廻のために業という考えもでてきます。つまり、いいことをした人はいい報いを受け、悪いことをしたひとは悪い報いを受ける。そして、その報いを受けながら生まれ変わる。それが輪廻だということになっていました。けれども厳密な身で言いますと、仏教では実態としての靈魂は想定しないのですから、輪廻説と矛盾します。そこで、それをどう説明するかということが大問題となったわけです。靈魂という実態は認めないけれども、それになんらかのフレームワーク *framework* (枠組み) があるのではないかということが、仏教のいろいろな学派で議論されました。けれども派によって解釈が違うので、すべての仏教徒によって認められる輪廻の説明というものはありません。なんとなく説いてはいますけど、突き詰めると必ずしも一致しないのです。なぜ一致しないかと言いますと、最初にブツダが『死後に靈魂はあるかないか、身体と靈魂とは同一か別か』と聞かれたときに答えなかったからです。そもそも、輪廻はブツダの教えを逸脱した論議ですから、どうにも一致した見解が得られないのです。しかし、一致した見解が得られなくてもかまわないと思います。仏教の教えは『人々に対して慈しみをもち、無我の精神をもって我執をなくして生きていけ』ということに尽きているわけですから、輪廻という形而上学的要請を立てなくても構わないのです」^(註14)

よく「輪廻転生」説が勝手に解釈されて、人間は生き返るから死んでも大丈夫だという間違った解釈がなさる向きがあるように思えて仕方がない。「輪廻転生」は仏教では正式にはすべての宗派に共通する内容としては存在しないと、中村は説いている。これもよく学んで理解しておかなければならないことの一つの例である。

次に「復活」と「生と死の教育」との関係で考えたいことは、「復活」は誰にでも平等にあるのではないということである。キリスト教では、生きている間に愛なる神に立ち返って生きることが求められているのである。そして、愛によって人々のために生きる生活が求められているのである。その点では中村元の仏教の「慈しみをもちて生きる生活」の考え方と同じである。したがって、死んでも生き返るという短絡的な生き方は成立しないということを知っておきたい。

このことがどうして出てくるのかということを三番目に考えたい。聖書で説く神の性格からその考え方が出てくるのである。聖書で説く神の性格をいくつか挙げてみよう。唯一なる神、天地宇宙の創造者、人格的存在、三位一体の神、靈的存在者、全知全能の神、正義の神、裁きの神、などである。ただ全知全能の神であっても、それは能力があって支配

する力がある神であるということだけになる。力ある支配者としての神は、恐れ之神である、という性格を表す。それでは真の神とは認めがたい。愛がなければ真の神としては認めがたい。しかしまた、愛の神であってなんでも、なんでも許す神であるのであれば、悪の存在に対して力のない神であり存在者として意味がない。そこで正義の神の性格が必要である。この世で正しい生き方をしなかった人はこの正義の神によって裁かれるのである。これがキリスト教の考え方である。

自分のいのちや、他の人のいのちを大切にしない人は裁きの対象となるのである。この厳肅な内容を知っておかなければならない。子どもたちに復活について教えるときに常にこのことを語る必要がある。何でも自由に振舞い、自分勝手に生きたいように生きるという生き方がキリスト教では許されてはいないのである。

現在はこのような考え方が失われてしまったように思えて仕方がない。生きる内容を「死後生」、「復活」との関係で論じない考え方が上滑りに人の心や生き方を支配してしまっているように思えて仕方がない。教育の世界でも、経済、活力、能力などの言葉に象徴的に表現されているように、教育自体が厳肅な、生きることと、死ぬこと、復活などとの関係で論じられていないことを考えなければならぬ。もっと教育自体のあり方、内容を「生」「死」「復活」などとの関係で再考する必要があると考えたい。

注

1. 中村博志 『生を通して生を考える教育—子供たちの健やかな未来をめざして—』川島書店 2003. この中の第2章、第3章において本文で紹介したアンケート調査の結果を紹介し説明している。
2. カール・バルト、山本和訳 『死人の復活—第一コリント書第15章講義』教文館 1990. p.7
3. 聖書の引用は文中に記したほうが理解しやすいので文中に記す。マタイ1・3と記されているのは、マタイによる福音書、第1章3節の意味である。聖書は日本聖書刊行会の1990年版の新改訳聖書を用いる。
4. 内容的に重要な文については聖書のギリシア語を文中に書くことにする。尚、引用するギリシア語は次の聖書である。Jay P.Green, Sr. General Editor and Translator『The Interlinear Bible Hebrew—Greek—English』HENDRICKSON publishers 1986. p.758
5. たとえば上田光正は『聖書論』日本基督教団出版局、1992の中で、聖書の神言性、人言性、正典性、解釈についてまとめている。また、榊原康夫は『旧約聖書の成立』1994、『新約聖書の成立』1996. をまとめているので参照されたい。(両著とも「いのちのことば社」出版)他にF.ケニヨン、山本七平訳『聖書の生い立ち』山本書店 1963.などがある。
6. テインデル聖書注解 New Testament Commentaries アラン・コール『マルコの福音書』山口昇訳 いのちのことば社 2005. pp.280-281
7. 関根正雄、伊藤進 『マタイ福音書講義』新地書房 1985. pp.414-415

8. 加藤常昭 『加藤常昭説教全集4 マタイによる福音書4』 教文館 2004.
pp.280-281
9. 榊原康夫 『マタイによる福音書Ⅵ』 小峰書店 1966. p.63
10. 関根正雄 前掲書 p.413
11. アラン 前掲書 p.282
12. 高橋三郎 『マタイ福音書講義(下)』 教文館 1993. P.95
13. 榊原康夫 『ルカ福音書講解5 15~20』 教文館 2006. p.405
14. 中村元 『人生を考える』 青土社 2005. p.p191-192

参考文献

1. G.リューデマン 『イエスの復活—実際に何が起こったのか』 橋本滋男訳 日本基督教団出版局 2001.
2. ヴアルター・キュネット 『復活の神学』 渡辺省三訳 新教出版社 1993.
3. 加藤隆 『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』 大修館書店 2000.
4. J.シュニーヴイント 『NTD 新約聖書注解 別巻 マタイによる福音書』 量義治訳 ATD・NTD聖書注解刊行会 1980.
5. E.シュヴァイツァー 『NTD 新約聖書註マルコによる福音書』 高橋三郎訳 1991.
6. D. R. A.ヘア 『現代聖書注解 マタイによる福音書』 塚本恵訳 2006.
7. 『アレタイアー釈義と黙想 マタイによる福音書』 日本基督教団出版局 2001.
8. ウルリヒ・ルツ 『EKK新約聖書註解I—3マタイによる福音書(18-25章)』 小河陽訳 教文館 2004.
9. 蓮見和男 『聖書の使信 私訳・注解・説教2 マタイに酔う福音書 下 13章—28章』 新教出版社 2002.
10. 川島貞雄 『福音書のイエス・キリスト2 マルコによる福音書 十字架への道イエス』 日本基督教団出版局 1996.
11. L.ウィリアムソン 『現代聖書注解 マルコによる福音書』 山口雅弘訳 日本キリスト教団出版局 2006.
12. シュラッケ 『新約聖書講解1. マタイによる福音書』 蓮見和男訳 新教出版社 1997.
13. 『NIB新約聖書注解2 新約聖書緒論 マルコ福音書』 挽地茂男訳 ATD・NTD聖書注解刊行会 2000.
14. 中村元 『生命の倫理』 春秋社 2005.
15. 井上順孝 『教育の中の宗教』 財団法人 国際宗教研究所 新書館 1998.